宇奈月町の金毘羅山とその周辺の植生について

－黒部川左岸の丘陵の植生－

若　林　一　成

は　じ　め　に

宇奈月町の金比羅山には、通称「下立の金比羅山」と「栃屋の金比羅山」の２つのピークがある。いずれにも、豊かな植物相を持つ林に囲まれた社があって、荘厳さを保ち、地区住民の心の拠り所として親しまれてきた。

ところが、どの境内も観光地化される危機にあり、雑木は切り払われようとしている。境内は信仰の対象としては勿論、自然に親しむ場、憩いの場、そして自然を学習する場として好適地である。

そこで、筆者は、1993年10月、植物相調査を行い記録に残すことにした。この資料が、やむを得ず林が切り払われる場合でも、残すべき種の選定の一つの資料になれば幸いである。

宇奈月町の金比羅山の場所

(1)下立の金比羅山

下立地区集落の南西側山地の山頂に位置し、標高342mである。正しくは、下立財産区松尾地内である。そして、山頂に下立地区唯一のお寺、曹洞宗全龍寺住職が世話をする金刀毘羅社がある。そのお宮周辺の山を俗に「下立の金比羅山」と言っている。下記の栃屋の金比羅山と同じく、黒部川扇状地の左岸西端「十二貫野台地」に続く孤高である。洪積層台地の赤土の山である。黒部川扇状地の扇頂「愛本橋」を真下に眺める。

(2)栃屋の金比羅山

下立地区より西に約6kmほど、黒部川左岸段丘沿いにくだった所にある。下立の金比羅山と同じく、栃屋地区集落の南西に位置し、標高260mの山稜にある。この山稜の一角に「栃屋金毘羅社」があり、このお宮も地区唯一のお寺、浄土宗法伝寺の住職が世話をしている。それ故、俗称、この地を「栃屋の金比羅山」と言っている。正しくは栃屋財産区の大谷地内である。ここも、洪積層台地の赤土の山である。しかし下立の金毘羅山と違い、金比羅山と殆ど同じ標高の尾根が長く、やがては黒部市宮野山運動公園に続く。眼下に黒部川扇状地の扇頂「愛本橋」から扇端の川口「村椿」まで黒部川扇状地の全景が見渡せる景勝の地である。

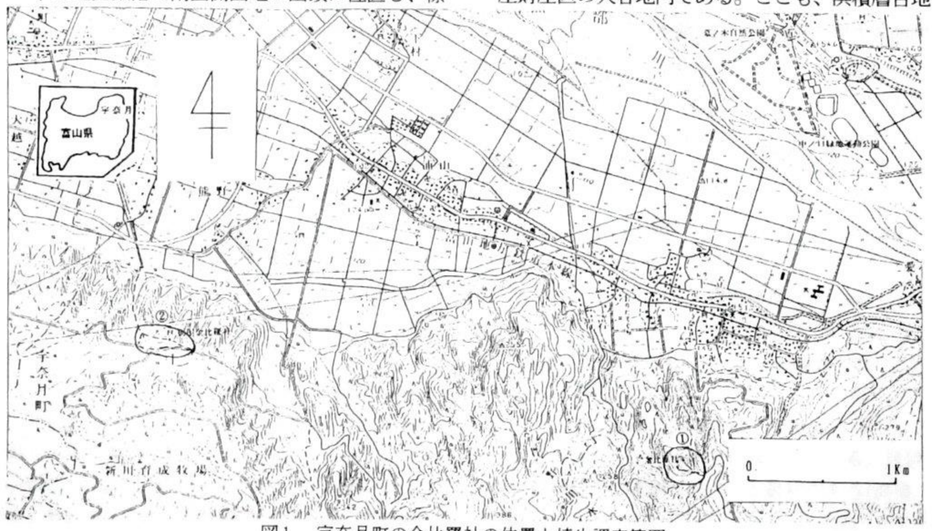

図1.　宇奈月町の金比羅社の位置と植生調査範囲
（地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図使用）

図２　スギ、ヒノキ、アカマツに囲まれた下立の金比羅社（1993年11月22日）。

図３　赤松に囲まれた栃屋の金比羅社（1993年11月22日）。

宇奈月町の金比羅山の植物リスト

（注）多いもの◎　少ないもの△

(1)下立の金比羅山(10月24日調査)

①樹木：アカマツ(◎), コメツガ(△植栽), ヒノキ(◎植栽), スギ(◎植栽), ハイイヌガヤ, チマキザサ(◎), サルトリイバラ, ウラジロノキ(△), ヤマザクラ, モミジイチゴ(◎), ナナカマド, エドヒガン(△), クリ(△), コナラ(◎), ミズナラ, ウラジロガシ, フジ, クズ, ヤマハギ, ダンコウバイ(△), アブラチャン(△), ミズキ, ヒメアオキ(◎), ヤマボウシ(△), バッコヤナギ(△), ソヨゴ(◎), ヤマウルシ, ホオノキ, ヒサカキ(◎), ヒメヤシャブシ(◎), ツノハシバミ(△), マルバマンサク(◎), サワフタギ(△), コマユミ, オニグルミ, ヒイラギナンテン(△), ネジキ(◎), ユキグニミツバツツジ, ホツツジ, ヤマツツジ, サツキツツジ(△), イワナシ(△), ウリハダカエデ(△), ウリカエデ(△), ヤマモミジ(△), タニウツギ, ミヤマガマズミ, コツクバネウツギ(△), ユズリハ(△), リョウブ, ツゲ, ツクバネ(△), ムラサキシキブ(△), ヤブコウジ,

②草木：ワラビ, シシガシラ, ゼンマイ(△), チゴユリ, ショウジョウバカマ, オオバギボウシ(△), ススキ(◎), ヤマノイモ, キンミズヒキ, アキノキリンソウ, ヨモギ(△), ノコンギク, ニガナ, ハハコグサ, ヤクシソウ(△), ヘクソカズラ, センブリ(△), クビキカンアオイ(△)

(2)栃屋の金比羅山(10月22日・23日調査)

①樹木：アカマツ(◎), ヒノキ(△植栽), サルトリイバラ(△), アジキナシ, ウラジロノキ(△), ウワミズザクラ(△), ヤマザクラ(△), モミジイチゴ(△), カマツカ(△), ノイバラ(△), ナナカマド(△), ナンキンナナカマド(△), クリ(△), コナラ(◎), ミズナラ(◎), ナラガシワ(△), ネムノキ(△), フジ, クズ, ヤマハギ, コマツナギ(△), シロダモ(△), ダンコウバイ(△), オオバクロモジ, ミズヒキ(△), ヒメアオキ, コバノトネリコ(△), イボタノキ(△), ヤマネコヤナギ(△), イヌコリヤナギ(△), ソヨゴ(◎), ハイイヌツゲ(◎)ヌルデ(△), ヤマウルシ, ホオノキ(△), タムシバ, ナツツバキ, ヒサカキ(◎), ヒメヤシャブシ(△), ツノハシバミ, マルバマンサク(◎), サワフタギ(△), ミツバアケビ(△), コマユミ, エビヅル(△), イワガラミ(△), エゴノキ, ネジキ(◎), ナツハゼ, ユキグニミツバツツジ(◎), ホツツジ, クロウスゴ(△), ハナヒリノキ(△), ヤマツツジ(◎), アクシバ(△), サツキツツジ(△), ウリハダカエデ(△), ウリカエデ(△), ハウチワカエデ(△), カラコギカエデ(△), タニウツギ, ミヤマガマズミ, ツクバネウツギ(△), ウコギ(△), コシアブラ(△), ハリギリ

(△), ヤマウコギ(△), エゾユズリハ(△), キリ(△), リョウブ(◎), カキ(△), ツクバネ(△), ムラサキシキブ(△), ナツグミ(△), ヤブコウジ(△)

②草木：ワラビ, シシガシラ(△), ゼンマイ(△), チゴユリ, ショウジョウバカマ, オオバギボウシ(△), ススキ(△), チカラシバ, シュンラン(△), シラン(△), ツユクサ, ヤマノイモ(△), イカリソウ, チドメグサ(△), キンミズヒキ, アカカラマツ(△), ヌスビトハギ, ゲンノショウコ, アカソ, トリアシショウマ, クルマバハグマ, センボンヤリ, フキ(△), アキノキリンソウ, ノアザミ(△), ヨモギ, ガンクビソウ(△), キッコウハグマ, ニガナ(△), ツルアリドウシ, ヘクソカズラ, ヤブコウジ, コシオガマ(△), イワウチワ(◎), タツナミソウ, オオバコ(△)

両金比羅山の植生についての考察

(1)下立の金比羅山の植生について

栃屋の金比羅山と違って、孤高である。自然、私の調査も範囲が狭くなった。山頂附近はアカマツーヒサカキ群落の様相を呈し、頂上は、アカマツ林で、お宮の境内はよく手入れされ、植樹もされている。ヒノキ、ツガ、サツキツツジ、ユズリハ、ヒイラギナンテン、ハイイヌツゲなどが境内に配置されている。なお、境内の裏山にはヒノキの大きな林があり、金比羅山への登り口には、これも植樹されたエドヒガン、ヤマザクラなどの桜が巨木になっている。登山道のそばにも、桜の幼樹が植えられている。

自然植生として特筆すべきは、オニグルミの高木がすぐ下の林の中に見られ、赤い実をつけたヤマボウシが雑木林の中に見られることである。頂上附近には黒部川扇状地の照葉樹の代表とも言えるウラジロガシが生えている。路傍にはイワナシ、センブリが少し見られ、貴重である。センブリは以前には新川牧場や魚津の天神山に見られたが、今はない。

(2)栃屋の金比羅山の植生について

下立の金比羅山と違い、長い稜線の東端に金比羅社がある。そして、金比羅山の直ぐ下を新川牧場の林道が通り、交通の便利な所にある。その稜線伝いに黒部市宮野山へ行くこともできる。私の調査範囲も、山頂から舗装された林道にまで及んだ。但し、主に山道沿いである。ここも、山頂附近はアカマツーソヨゴ群落が天蓋となっている。ここの境内は殆ど自然の樹木からなり、サクラの高木2本、ヒノキの中木1本、サツキツツジ1株、シランが少し植えられているだけである。

植生の特徴として、山頂の境内に亭々としたアカマツ林は勿論、根元でくっついた幹周り95cmと87cmの高木のソヨゴが茂り、自然なエゾユズリハ、ナナカマド、リョウブ、サワフタギなどがよく育ち、藪を作っていることである。山頂近く、稜線の北東側雑木林の下草として、下立の金比羅山には見当らないイワウチワが大きな群落をなしている。そして、早春の開花時期には、見事なお花畑となる。また、ネジキ、マルバマンサク、リョウブなどの林が尾根の小道に覆いかぶさっている。山頂への登り口「竜ノ口用水」の出口近くの雑木林の中に大きなナツツバキ、幹周り74cmと42cmが2本立ち、白くきれいな花をつける。

登山道は早春3月頃にはマルバマンサクの「黄色い花」、春4月頃にはユキグニミツバツツジの「紅紫色(ピンク)の花」の花道となり、初夏5月頃には「真っ赤な花」ヤマツツジの道となる。地元の昆虫学者故田中忠次先生が生前、私によく言っていた先生自慢の「タツナミソウ」の群落が社(やしろ)の前にあり、春先、紫色の花を波頭のようにつけて、陽光に映える。

宇奈月町の金比羅山景観保持への提言

それぞれの金比羅山には歴史があり、特長がある。下立の金刀毘羅社は讃岐の金比羅宮の分身といった由緒があり、山林を大切にする下立地区住民の心が篭っている。栃屋の金比羅社は、かの有名な「十二貫野用水」の支流「竜ノ口用水」が完成した時、作られたという経緯がある。それぞれの住民の心のより所であり、誇りである。

それぞれの景観にも特長がある。愛本橋、愛本発電所を見下ろせる下立の山、一方、黒部川扇状地の全体を一望可能な栃屋の山。しかし、樹木がない裸の境内であっては、潤いがなく、憩いがない。それぞれの植生の特長を保持増進しつつ、これからも一層、黒部川扇状地に住む人々の憩いの場としたいものである。

参 考 文 献

牧野富太郎, 1989. 改訂増補新日本植物図鑑. 北隆館. 東京.